新 刊

□田中　肇：**昆虫の集まる花ハンドブック**
11 × 18 cm. 80 pp. 2009. ¥1,200. 文一総合出版. ISBN: 978-4-8299-0139-7 C0645.

花と昆虫の関係は,「蜜と引き換えに花粉を運んでもらう」ことくらいは常識だろう．だから虫が花を訪れていても,「ああ，やってるな」という程度で眺めているし，観察会でも，いくつかの紋切り型のパタンをあてはめた説明で，わかったつもりでいた．花に虫が群がっていても，10 分もすれば蜜を吸い尽くして一匹もいなくなるのが普通とか，カタバミの花は 4 時間しか開いていないとは知らなかった．

本書は 1 頁に 2 種類ずつ，それぞれ 3 枚のカラー写真と簡単な記述で，142 種類の花について，色，形，構造，姿勢，動作などが，虫の習性と関連づけて解説されている．とにかく千差万別で，蜜を持たない花が結構ある．花には雌と雄の時期があり，それに応じた姿勢をとることも念入りに記されている．

植物の配列は花の色でまとめられ，学術用語は使用しないよう心がけたと序文にある．つまり，キクの舌状花だろうとニリンソウのがく片だろうとクロバナヒキオコシの唇状部だろうと「花びら」である．この方が結構わかりやすい．送粉行動にかかわる花のタイプ分けが「長管」「下向き」「はい込み」といった，七つのアイコンで示されている．花期のアイコンも七つある．多くの花は，よほどうまくルーペを使っても，どこに何があるやらわからない．定評ある著者の接写と実物を見比べれば,「観察した」という充実感が得られるだろう．この本を手に，花の前でジックリ座り込んで観察する人が増えてほしいものだ．もっとも，近頃のように何十人もの集団で，植物名と近似種の違いを連呼しながらコースを消化しようとする中でそれをやると，大渋滞になるだろう．一人静かに時を忘れるような観察に向いている．袋綴じなので，ハンドブックとして野外で頻繁に開閉するとこわれてしまいそうで，背中をホッチキスで綴じる簡易製本の方が使いやすかったと思う．

（金井弘夫）

□邑田　仁（監），米倉浩司：**高等植物分類表**
11.5 × 18 cm. 189 pp. 2009 Oct. 20. ¥2,381. 北隆館. ISBN: 978-4-8326-0838-2 C3045.

伊藤　洋氏の高等植物分類表は，その簡便な記述によって，永年にわたって多くの人たちに利用されてきたが，1968 年が最後の改訂であり，その後の進展に対応するこの種のハンドブックはない．とくに最近の分子生物学の急激な発展の結果，様変わりした分類体系を，簡潔に整理表現した分類表が期待されていた．

本書は DNA による分子系統学の最新の結果を総合した APG 分類体系に，シダ類，裸子植物などの同様な成果を加えて整理したもので，われわれがこれ迄なじんで来たどの分類体系とも異なっており，とくに旧体系で一つの科にまとめられていた属が，あちこちのかけはなれた科に配置換えされている上，目の内容や配置も異なっているので，とまどうどころか船酔いを起こしそうな「混乱」ぶりである．29-102 頁に示された分類表 (APG 対応) で，それを実感できるだろう．だからその前に，2 頁の「この分類表の使い方」と 13–28 頁の「新しい植物分類体系」をじっくり読んでおく必要がある． 酔い止め薬として，103–113 頁に伊藤：新高等植物分類表との対照表が，114–125 頁に Cronquist と Engler の分類体系との対照表が用意されている． 127 頁以降に属以上の学名（約 3,400 件）と和名（代表的種名を含む）の索引があり，約 5,200 件の和名の所属が検索できる．

（金井弘夫）

□大場秀章（編著）: **植物分類表**　B6 判. 511 pp.
2009 Nov. 20. ¥3,333. アボック社. ISBN: 978-4-900358-61-4 C3045.

基本的には米倉氏の高等植物分類表と同根であるが，細部では順序が入れ代わっているところがある．たとえば，1-247 頁にわたる分類表の最初の頁の目の順序は，米倉本ではヒカゲノカズラ目，イワヒバ目，ミズニラ目であるが，大場本ではヒカゲノカズラ目，ミズニラ目，イワヒバ目となっている．凡例は 6 頁におよぶ丹念なものである．257 頁からは植物分類体系の変遷と題して，75 頁にわたってリンネから今日に至るまでの歴史を解説している．学名索引（333–391 頁）は約 8,300 件が見られるが，示種名まで示してあるのは，和名がなかったりなじみが薄い栽培品に限られる．和名索引 (393–511 頁) は約 16,600 件．わが国の野生植物のおそらくすべてに加えて，多くの栽培品も含まれている．xxxi–xxxviii 頁には科が変更された主な属の一覧があり，約 200 属が従来知ら